六甲山地の観光・休養地化について

稲見悦治
森昌久

一はしがき

神戸市街地の背後に屏風をたてたように横たわっている六甲山地は、最高地点の東六甲山でも標高は九三二メートルで必らず高い山とはいえないが、急傾斜の逆断層面を大阪湾側に向けて横たわっているので、山頂からの眺望は百万ドルの夜景の名にふさわしく素晴らしいし、また都心部から手軽に山登りの気分を味うことができる絶好な山であるといってよい。また、山頂の気温は、神戸市街地のそれにくらべると平均四～五度低いので、夏は保養に、冬はスキー、スケートを手軽に楽しむことのできる絶好の山地で、明治中期に英人グルームが山頂に山荘を構え、付近にゴルフ場を造って夏の保養地として利用して以来、神戸市や阪神在住者の観光、休養地としてはなばなしい発展をとげてきた。六甲山地は前述のように明治中期以来阪神地方随一の観光、休養地として知られるにいたった土地であるのと、昭和十三年七月豪雨を始め、同山地一帯が集中豪雨に見舞われるたびに山麓の神戸、芦屋市街地などが甚大な被害を蒙ってきたので、同山地の地形、地質については本間①・上治②③・藤田博士④、生物については室井氏⑤、地形地質

と山崩れとの関係については毎日新聞神戸支局[6]、同山地を巡る歴史と文学などについては竹中氏[7]、六甲山頂の外人村その他については西村[8]、福本氏[9]その他[10]、自然と人文との概観については前述の毎日新聞神戸支局[11]、裏山登山については落合氏[12]、昭和以降の開発の経過については阪神[13]、京阪神急行電鉄[14]というぐあいにすでに数多くの研究あるいは報告書が出されており、いまさら筆者らが蛇足を加える必要がないかのように思われる。ところが先学者のこれまでの研究の結果を検討すると、六甲山地をめぐる自然現象のような時期的変化の乏しいものについては戦前に続き戦後も着々研究が進められているし、また移り変りのはげしい人文、社会現象でも、明治以前および、明治中期から大正初期にかけて突如出現した六甲山頂の外人村などについては今となってはこれ以上の研究は不可能と思われるところまで研究がすでに進められている。ところが、外人村没落以後に発生した六甲山地のあわただしい観光、休養化についてはその間に第二次世界大戦という思いがけない事件がおこり資料が散逸したためか、まとまった研究が行われていないように思われる。そこで筆者らは外人村発生以後に重点をおいて六甲山地がどのように開発されてわが国屈指の山岳観光、休養地化の道をたどって現在に至ったかを研究し、その結果を報告して、先学諸賢の批判を仰ぐことにした。本研究を行うに当っては神戸市の水道局、調査室その他の神戸市当局あるいは六甲山頂の派出所勤務の警官諸氏、六甲山自治会長、六甲山小学校教官その他数多くの人たちに多大の援助を受けた。ここにその由を記し厚く感謝の意を表する次第である。

① 本間不二男　六甲山地の形成　地球　一〇の四、一九二八年。
② 上治寅次郎　五万分一　六甲山塊地質図　一九三八年。
③ 〃　六甲山塊の地質と構造　地学雑誌　五八四、一九三七年。

④ 藤田和夫他二氏編　五万分一　神戸市及び隣接地域の地質図　一九六四年。
⑤ 室井綽編　六甲の自然　一九六〇年。
⑥ 毎日新聞神戸支局編　六甲山を切る　神戸版連載　一九六七年。
⑦ 竹中靖一　六甲　一九三三年。
⑧ 西村貫一　日本ゴルフ史　一九三〇年。
⑨ 福本椿水　半世紀前の六甲山誌　株式時報
⑩ 神戸ゴルフ倶楽部史　一九五八年　一九六五年。
⑪ 毎日新聞神戸支局編　六甲山系　一九六三年。
⑫ 落合重信　神戸裏山登山史略　一九六三年。
⑬ 阪神電鉄株式会社　輸送奉仕の五十年　一九五五年。
⑭ 京阪神急行五十年史　一九五九年。

二　外人による六甲山地の開発

Ⓐ 外人村出現以前の六甲山地

わが国では、比叡山、高野山、信貴山その他の山地の場合でみられる通り、俗界から隔離された山地は、信仰を対象とした神社あるいは仏閣などの進出で早くから開発された場合が多かった。ところが六甲山地は、山頂の平凡さが災してか、神社、仏閣といえば摩耶山頂（六九八メートル）の忉利天上寺、および再度山頂（四六八メートル）の大竜寺、山麓の甲山（三〇九メートル）中腹の神呪寺および付近の鷲林寺、塩尾寺（何れも廃寺）ぐらいのものでありそれらの寺院は何れも六甲山地の前山に位置し、主峯の六甲山頂には神社、仏閣は全然存在しなかった。こんなぐあいで六甲山頂は明治二八年神戸の貿易商人グループが三国池のほとりに山荘を構え、友人に紹介し、雲仙山頂の外人

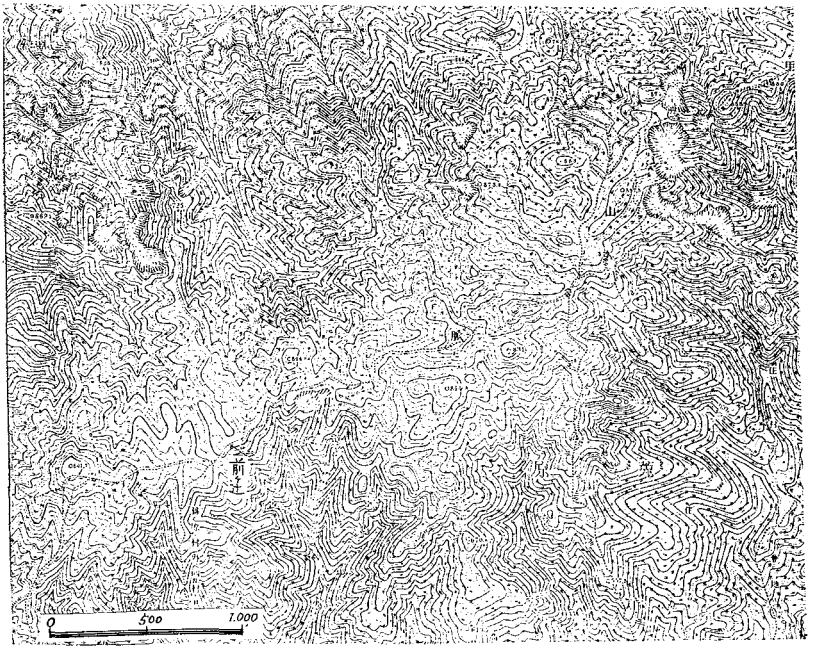


図 1　明治18年頃の六甲山頂付近

村と併称された集落が誕生するまでは「古来六甲山は不毛の土地として関係村たる武庫郡六甲、都賀浜、山田および本村所轄唐櫃村の諸村は、雑草刈取りをもって唯一の目的となせるところなり。（中略）該目的の他において人馬の通行も冬季を除き寥々としてその数知るほどなり。」と有野村々長河原市太郎氏の英人グルーム宛の書簡にある通り、山麓の人たちが採草地として利用し、時には寛文九年や享保十四年に発生した領域についての山争い[15]が起るなどの事態が発生するようなことはあったが、人々が定住するにはいたらなかった。

また、北摂と阪神地方とを結ぶコースのうち六甲山越のコースは、武庫川低地づたいの有馬街道、湊川の支流天王川低地づたいの有馬道にくらべて道そのものは難路であったが、時間的な距離がかなり短いので早くから魚屋道、有馬、住吉道、石切道、寒天山道、前ノ辻道、杣谷道、布引道、再度道などの

踏み分け道が早くから生れ、旅を急ぐ人たちに利用されてきた。そればかりか正徳年間、駅法の改正で、街道筋に宿駅が設けられ、通行料を取られるようになると⑯⑰、脱税の手段の一つに六甲越の道を選ぶ人たちが増加し、いわゆる抜け荷道が発達したが、常住集落が発生するには至らなかった。さらに六甲山地は前述のような抜け荷道として選ばれたばかりか、幕末には外国人との紛争を恐れた幕府によって西国街道の表街道に指定されようとした。現在石楠花山の南麓を東西に通ずる徳川道がそれで、幕府は、浜手伝いの西国街道を住吉、石屋川付近から篠原、摩耶、小部(おおぶ)、藍那、白川、大蔵谷を経て明石に通ずる山手に移し、神戸に上陸する外人との紛争を避けようとしたが、徳川幕府の崩壊で中絶し、この場合も沿道に集落を発生させるに至らなかった。

⑮　有野村誌　二三六～二三九頁　一九四八年。
⑯　八木哲浩　近世宿駅論争―摂津国有馬郡生瀬駅の歴史―　神戸大学「近代」七　一九五三年。
⑰　池野　茂　裏六甲の道路系と宿駅生瀬の動向　人文地理　一二の三　一九六〇年。

Ⓑ　アイスロード

世界的な気温の上昇か、それとも山麓の急激な都市化のためか、近年六甲山頂の冬の気温は零下十数度に下ることは稀で、山麓の神戸市との気温差は一応四～五度はあるが、山頂の池の水が長期に亘って結氷することは珍らしいが、明治の前期には釀寒の候には山頂の自然池は結氷することが多かった。これに着目して始まったのが冬山頂の池の氷を氷室に貯蔵し、夏季に神戸市街地に運び出すという商売であった。六甲山頂の氷を冬切り取り、夏まで山頂に貯蔵し、夏、神戸市街地に運び売り出す商売が神戸市の山田、浅井店で始められたのは明治二十年前後のように思わ

れるが⑱、土橋から前ノ辻を結ぶけわしい前ノ辻道は、アイスロードとしてまた土橋方面と六甲山頂方面とを結ぶ最短コースとして見直されたのみならず、後日ロープウェーのコースとして選定された。また天然氷の採取のため造られた西は三国池方面から東は八代池方面にかけて分布する多くの溜池は、現在冬季はスケート場として春、夏、秋の候は山頂の風情を添える大きい役割を果たしている。すなわち川西、松方、川崎、住友、九鬼その他付近の山荘所有者の名などに因んだ大小三十余の池は自然池の氷の不足を補うために新たに掘られた人工池であり、六甲山地の観光、休養化に思いがけない素材を提供することになった。

⑱ 毎日新聞神戸支局編の「六甲山系」によると六甲山頂の天然氷の採取が神戸市の浅井、山田両店で始まった年はグルームの六甲山頂の山荘経営に先だつこと二十年すなわち明治七～八年頃となっている。ところが明治十八年測図の二万分一地形図「六甲」図幅には六甲山頂の溜池は記載されていないし、明治二十八年三国池畔に山荘を建設したブルームたちは池にボートを浮べて遊んだとあるから、六甲山頂の溜池から氷の切出しが始まったのは明治二十年前後といえそうである。

◎ 在神外人による六甲山頂の開発

六甲山地は前述の通り、江戸時代はもちろん明治初年に入っても山麓の人たちが薪や木炭の材料あるいは牛馬の飼料を求めて入山するか、北摂、阪神地方を結ぶ最近コースとして利用する人があったが、常住集落が発生するに至らなかった。また明治二十年頃、在神の氷屋の手による天然氷の切り出しが始まったが、これとて季節的な集落の発生をみた程度であり常住集落化するにいたらなかったが、明治二十八年、在神外商アーサ グルームが六甲山頂の風物が故郷英国の風物に類似しているのが気に入り、三国池畔に四六坪の山荘を建設するにおよんで六甲山地は保養、観

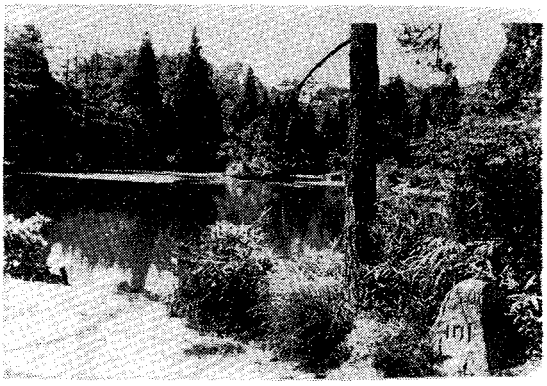


写真 1　三国池とグルームの山荘跡
石碑はグルームの居留地の家屋番号

光地として新らしい時代を迎えることになった。いいかえると、グルームが三国池畔に山荘を建設し、居留地の商館の番号に因み一〇一号館と称し、友人に紹介するや、神戸市街地の酷暑に堪えかねていた外人中には続々六甲山頂に山荘を構えるものが相次ぎ、数年後には三国池から前述にかけての尾根づたいに一〇四、二〇、五六、一〇〇、五二、一二、三二、四六、九、一八、八三、五三号館、ノースロード沿いに七、一〇、一〇九、六六、

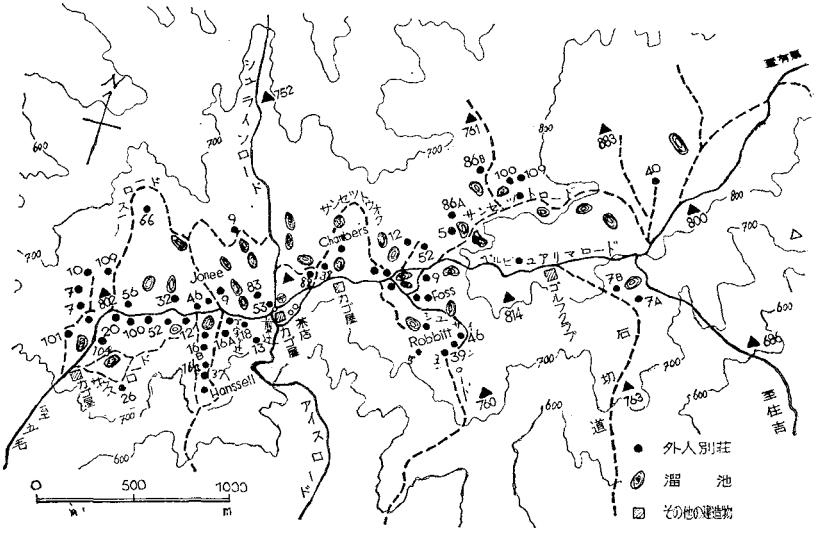


図 2　明治末期の六甲山頂集落と地形との関係

九号館、サンセットウォク付近に八八、三八、記念碑付近に一二、五二、九号別館、サンセットロード付近に五、八六、一〇〇、一〇九号館、奥山谷道に八六B号館、シュサインロード付近にフオス、ラビット山荘、四六、三九号館、石切道に七A、B号館、ベルビュアリマロード付近に四〇号館というぐあいに西は三国池付近から東は現在の高山植物園付近にかけて東西に広がる尾根づたいの平坦面につぎつぎ外人山荘が立ち並ぶにいたった。そして四十三年頃には英人山荘二八戸、独人山荘九戸、米人四戸、仏人二戸、白人一戸その他というぐあいに各国人の山荘が立ち並びその数は四四戸、さらに大正初年には五四戸にのぼり、外人を中心とした保養集落ができ、大正五年には駐在所まで設置されることになった。

また、当時六甲山頂に山荘を構えた外人は神戸市内の居留地と山頂の山荘との往復に五毛あたりからカスケードバレー(杣谷道)、大石、新在家方面より六甲、篠原を経て土橋にで、そこから前ノ辻道、アイスロードあるいは土橋から右に折れるけわしいショートカット道をカゴあるいは馬などを利用したので、カスケードバレーの終点三国池付近、アイスロード(前ノ辻道)の終点などにはカゴ屋の丁場ができ、付近に茶店、売店が集まり郵便局も設けられるなど休養集落の発生を促進した。また六甲山頂に山荘を構えた外人は、ベルビュアリマロード沿いの海抜八〇〇メートル内外の草原に着目し、明治三十四年(一九〇一年)に四ホールのゴルフ場を建設し、三十六年に九ホール、同四十年に十八ホールというぐあいに拡張し、六甲山頂の景観を多彩ならしめ、同三十六年にはわが国最初の神戸ゴルフクラブを創設した。また六甲山頂に山荘を構えた外人は道路の開発に当った。現在もなおシュラインロード、サウスロード、ノースロード、サンセットロード、サンライズロード、シュサインロード、ベルビュアリマロード、シエールロード、あるいはゴールデンポイント、ダイヤモンドポイントなどの外国名地名や道路が少くないのはその名残りであ

り、後日、六甲山地の観光、休養地化に貢献するところが大きかった。

三　電鉄会社による六甲山地の開発

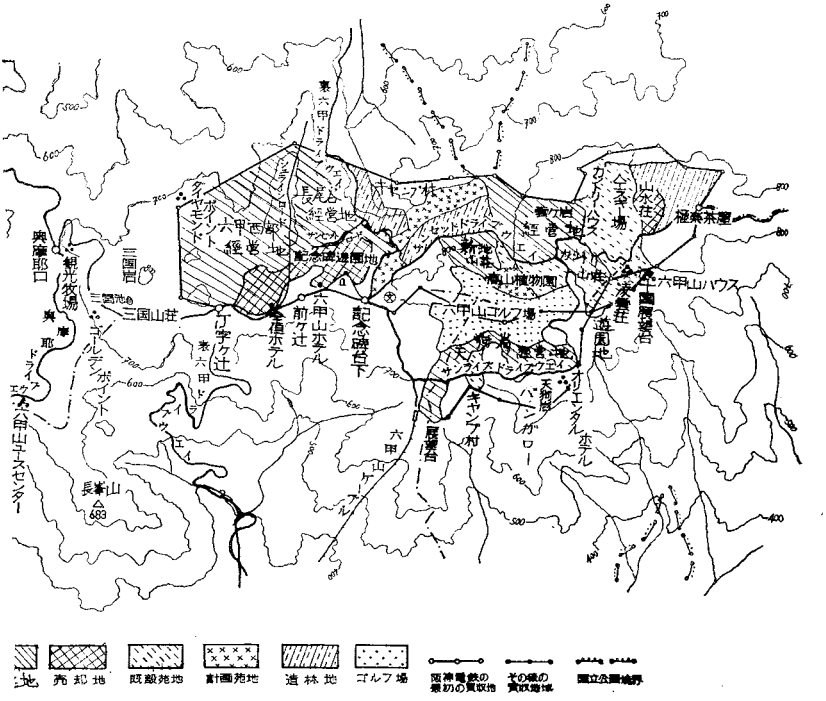
Ⓐ 欧洲大戦の勃発と邦人の山頂進出

六甲山地は前述の通り、明治二十八年にグルームが三国池畔に山荘を構えて以来、外人の避暑地として脚光をあびることになったが、そうなると別荘番人、厨夫、ボーイ、女中としてまた外人相手の商売のために邦人の山頂に進出するものが多くなった。また外人に見習って山荘を構えるものが多くなり、すでに明治四十三年には六甲山頂山荘五六戸のうちその二一％（十二戸）は邦人所有のものであり、大正三年の山頂の夏季人に三六三人（但し外人の子供は除く）のうちその六〇％（二一九人）は邦人が占めるという情勢で邦人の山頂進出は急激に目だってきた。そうしてこうした傾向は欧洲大戦の勃発で決定的になった。

大正三年欧洲大戦が勃発するや、六甲山頂の別荘所有の在神外人貿易商は甚大な打撃を受け続々帰国したのに対し、港都神戸は未曾有の好景気到来で成金が続出した。そして戦争で巨額の富を得た松方、滝川、小寺、広岡、川西、黒川、鈴木その他の富豪のなかには、須磨、布引その他の山麓の景勝地とならんで六甲山頂に山荘を構えるものが相ついだ。そのため外人村時代山荘化が後れがちであったシュラインロード、ノースロード、サウスロード一帯副屋根の景勝地の山荘地化に新時代が到来するとともに、六甲山頂の富豪の山荘地化に黄金時代を迎えることになった。

Ⓑ 電鉄会社による六甲山地の開発

ⓐ 阪神電鉄の場合　大正三年に勃発した欧洲大戦は、明治中期以後突如発生し長崎県雲仙山頂の外人村と併称さ



の土地利用

れた六甲山頂の外人村を没落させ、邦人の富豪避暑地として六甲山地を見直させたが、昭和に入って阪神電鉄、京阪神急行電鉄などが改めて山地の開発に乗り出すにおよんで、高額所得者のみならず、一般庶民の観光、休養地として新しい時代を迎えることになった。

阪神電鉄は、明治末期に六甲ホテル西方の小寺別荘を買入れ、社員および一般登山者の休養施設にあてたり、欧洲大戦の勃発で帰国した外人に代って進出した邦人別荘に電気を供給するなど六甲山頂の開発に早くから着手してきたが、昭和二年、小学校建築費の捻出のために有野村が売り出した西は二つ岩から東は六甲山地最高峰に近い極楽渓付近、北はダイヤモンドポイントから雲ケ岩、南は前ノ辻から記念碑に至る部落

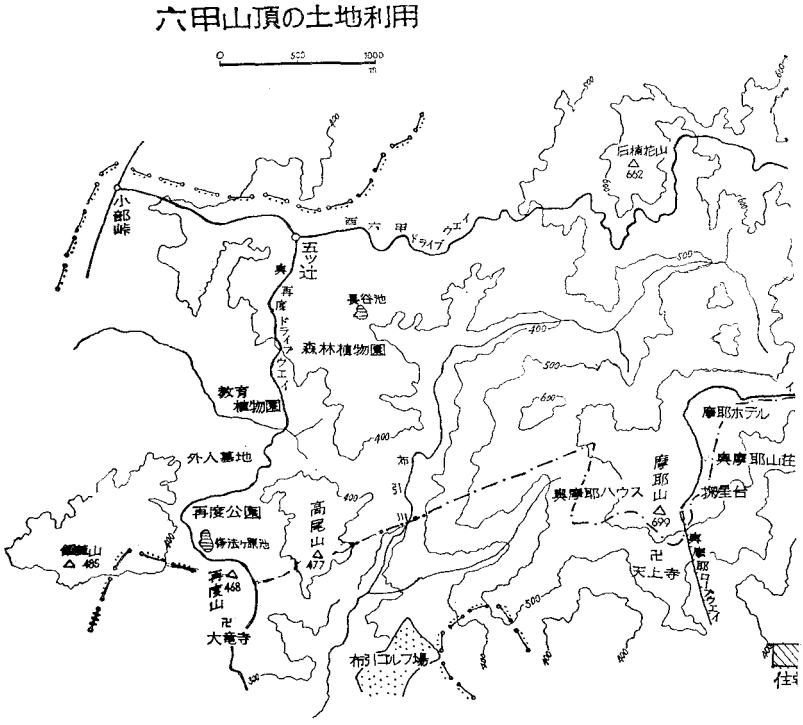


図3　六甲山頂

所有地二五一町歩、さらに同六年甲上土地会社が住吉村から買上げ契約中の六甲山ホテル付近の土地三十余町を買収するとともに凌雲荘遊園地付近その他の土地五十町歩を譲り受け、観光、休養地として総合開発に乗り出すにおよんで六甲山地の観光休養地化に新らしい時代が訪れることになった。

阪神電鉄は有野村唐櫃その他から買入れた約三百町歩に近い六甲山頂の土地を開発するに当り、山地の開発の成否の鍵は水と観光資源にあるとの構想に立ち、水源を確保するための水源、森林地区の保存につとめるとともに、山頂を訪れる人たちを楽しませる遊園施設、山上住民のための商業施設など従来ややもすると見逃がされてきた観光、休養、娯楽施設の整備に慎重な配慮をめぐらすとともに、外人が山頂に別荘を

構えて以来、六甲山地の特色となってきた保養地化を進めるに当っても、新たに一般庶民用のものを加えるなど多角的な開発を企図した。そしてその手はじめに全経営地を森林地区、水源地区、遊園地区、住宅および商業地区の五つの地区に区分して建設の名のもとに行われやすい破壊防止の総合開発を昭和五年頃から本格的に開始した。

まず六甲山地の観光、休養地化の基本ともみられる水源地や風致資源保持のため、水源、森林地区として現在のサンセットドライブウェイならびに東六甲縦走ドライブウェイ以北の長尾谷、清水谷、山水谷地区を当て、宿泊施設としては天狗岩付近の景勝地の六甲オリエンタルホテル、その東北方の景勝地の凌雲荘、六甲山ハウスなどを当てることにした。また遊園地としては、昭和八年には清水谷の景勝地一万坪に標高八〇〇～九〇〇メートルの六甲山地特有の気候を生かして千数百種におよぶ高山、冷涼地の植物を集めた高山植物園、同十二年には八代池付近の景勝地五万坪には、ベビーゴルフ場、スキー、スケート施設、運動広場、観光リフト、釣池など子供用の遊園施設を備えたカンツリハウス遊園地、山頂内随一の展望地の標高八八〇メートル凌雲荘ホテル付近に凌雲荘遊園地、大正三年六甲山地開発パイオニア、グルームの功績をたたえた六甲山開祖の碑が建てられて以来、急に脚光をあびるにいたった六甲山ドライブウェイの分岐点に記念碑遊園地にあてたり、長尾谷、新池付近の景勝地を新たに苑地に指定するなど六甲山地の観光、休養地化を進めるに当ってはこれまでみられなかった創意と工夫をこらした。

また六甲山地の保養地として開発を進めるに当っても阪神電鉄当局は、これまでのような高額所得者本位の住宅地化のほかに一般庶民の住宅地化という新らしい方針を加え、六甲山ゴルフ場の南側すなわちサンライズドライブウェイ北方の天狗岩付近の景勝地やサンセットドライブウェイ北方の雲ケ岩付近の景勝地を高級建売り、貸山荘地区、カンツリハウス付近を中級建売り、貸山荘地区、サンライズドライブウェイの南斜面その他の地区をバンガロー地区あ

図 4　昭和9年頃の六甲山頂の集落

るいはキャンプ村地区に当てるなどそれぞれの土地の特色を生かして保養地化を進めた。こうした阪神電鉄の六甲山荘における保養施設の多角経営は、高額所得者のみならず、冷涼地に社員の山の家を求めてやまなかった銀行、会社、官庁などの要望をみたすことになったばかりか、バンガローキャンプ村は青少年にもいたく喜ばれ、青少年たちの夏の天国となるとともに昭和八年の天狗岩住宅地建設を皮切りに山水荘、カントリー山荘というぐあいに続々新住宅地が生れ、わが国屈指の山荘地として内外に知られるにいたった。

また、六甲山地の開発の鍵の一つは交通施設の整備如何にありとみた阪神電鉄当局は、六甲山頂と山麓とを結ぶ交通施設として土橋、丁字ケ辻間の表六甲ドライブウェイを昭和二年、記念碑前、唐櫃間の裏六甲ドライブウェイを翌三年、増井谷、前ノ辻間の六甲ロープウェイを同六年、土橋、山頂間の六甲ケーブルを同七年にそれぞれ完成した。また表、裏六甲ドライブウェイは昭和四～五年頃から定期バスがすでに乗入れていたにもかかわらず、山頂の交通施設の整備の後れて

表 1　戦前における六甲山地の交通施設整備状況

大正11年	摩耶ケーブル　高尾―天上寺間(0.9km) 完成
昭和2年	表六甲ドライブウエイ　土橋―前ノ辻間(4.8km) 完成
昭和3年	裏六甲ドライブウエイ　記念碑下―唐櫃間　完成
昭和4年	表六甲ドライブウエイ　定期バス乗入れ開始
昭和5年	裏六甲ドライブウエイ　定期バス乗入れ開始
昭和6年	六甲ロープウエイ　摂井谷―六甲山ホテル間(1.7km) 完成
昭和7年	六甲ケーブル　土橋―六甲山頂間（2km）完成
	六甲山頂回遊　道路ケーブル山上駅―記念碑下―高山植物園―山上駅間（7km）完成
昭和9年	東六甲縦走ドライブウエイ　極楽渓―逆瀬川間　完成
昭和13年	7月豪雨でドライブウエイケーブルその他甚大な被害を受ける。
昭和19年	2月六甲ケーブルその他運行休止，軌道の撤去始まる。
	六甲ケーブルのみ軌道の撤去を辛うじてまぬがれる。
昭和20年	西六甲縦走の軍用道路　小部―奥摩耶間　完成

いるのを知り、まず六甲ケーブル終点と同社の経営地との連絡を緊密化するためにケーブル終点の山上駅、記念碑前間、山上駅、極楽渓間約七キロメートル、記念碑前、極楽渓間三キロメートル、計約一〇キロメートルにおよぶ六甲山廻遊道路の建設に着手し、同七年完成するにいたった。さらに翌々年の昭和九年には東六甲の極楽渓と宝塚市逆瀬川にいたる県営の東六甲縦貫道路の建設費の半ば約三〇万円を提供し同道路の建設促進に尽力した。その結果、明治、大正時代までは神戸市街地との交通連絡の悪いことも災して開発がおくれ勝ちであった東六甲の山地は画期的な阪神電鉄当局の開発のアイデアと交通施設の整備と相俟って六甲山地の観光、保養のセンター的性格を帯びることになった。

ⓓ　阪急電鉄の場合　阪急電鉄は阪神電鉄にくらべると地の利を得ていたにもかかわらず六甲山地の開発の機会を失し、阪神電鉄に一歩も二歩もおくれを取った。しかも昭和の初め奥村千吉所有の丁字ケ辻一帯七〇町歩および付近の阪神電鉄所有地九・八万坪の買収に成功するや、阪神電鉄系の六甲ケーブルと対抗するため、増井谷、前ノ辻間一・七キロメートルをロープウェイで結

写真 2　記念碑下に出現した六甲山頂の商店街風景

び、終点に六甲山ホテルを配し、付近の開発に着手した。阪急系の六甲ロープウェイは阪神系の六甲ケーブルより一年早く開通したが、阪急電鉄の経営地は阪神電鉄のそれにくらべて著しく狭小で画期的な計画案をたてることができなかったのみならず、戦時中、金属回収で撤去されてしまったロープウェイは戦後復旧の機会を失した。しかしながら阪急電鉄経営地内の前ノ辻は外人村発生当時以来の交通の要地であるうえに、近くの記念碑付近が観光バスの駐車場に指定されたので、その時以来連日観光客で賑わい最近では六甲山地随一の商業地区にかわった。

四　神戸市による六甲山地の開発

Ⓐ　摩耶山天上寺付近の遊園地化

山頂に準平原の平坦面が広く横たわっている六甲山頂はゴルフ場あるいは山荘、種々の観光、休養施設を整備するのには好都合な山地ではあるが眺望のよいところは意外に少ない。ところが大化二年法道仙人の開基と伝えられている前山の摩耶山頂は標高こそ六九八メートルで取りたてていうほど高い山ではないが、六甲山地の前山前面に横わる断層崖上に位置し、展望は六甲山地中随一ともいうべき土地で、神戸市の都市化が進むにつれて登山をかねて参拝する人たちが年を追って多くなった。このような摩耶山天上寺付近の観光地的な要素に着目して大正十四年に山麓の高雄と天上寺間九〇〇メートルを結ぶ摩耶ケーブルが敷設された。同ケー

ブルは大阪府下の生駒ケーブル、信貴山ケーブル、神奈川県箱根ケーブルにつぐわが国の第四番目のケーブルとして登場したため、物珍らしさも手伝って連日乗客が殺到した。その結果ケーブルの終点には四階建の摩耶ホテルを始め、旅館、観光施設がつぎつぎ建てられ、信仰を対象とした、天上寺付近は一転して観光、休養地に変ってしまった。

Ⓑ 奥摩耶の遊園地化

外人村時代の踏み分け道に代って、昭和時代に入って急速に整備され、六甲山頂の観光、休養、保養地化に貢献したドライブウェイは昭和十三年七月の集中豪雨で壊滅的な被害を受けたし、摩耶山天上寺付近の観光、休養地化の原動力の役割を果たしてきた摩耶ケーブルも戦局が急迫した昭和十九年に六甲ロープウェイとともに金属回収を理由に撤去され、六甲山頂ならびに前山の摩耶山の観光、休養地は完全にストップしてしまった。ところが戦後の昭和三十年に摩耶ケーブルは復旧をみたし、摩耶ケーブルを復旧するに当って神戸市は同ケーブル終点の山上駅の北方八〇〇余メートルの地点に位置し、戦時中高射砲陣地に利用されていた奥摩耶の掬星台一帯の払下げを受け、同地に展望台、各種の遊戯施設や野外劇場などを配置した遊園地化を計画するとともにケーブルの終点山上駅と同遊園地間八二七メートルをロープウェイで結んだ。そして奥摩耶遊園地と背後の西六甲、東六甲との間との連絡には戦時中に神戸市街地と奥摩耶の掬星台の高射砲兵陣地との連絡路を以てし、昭和二十年には定期バスも通ずるようになっていた軍用道路の後身である西六甲ドライブウェイおよび奥摩耶ドライブウェイをあてた。西六甲ドライブウェイと奥摩耶ドライブウェイとの分岐点奥摩耶口には、昭和二十五年に着工されたスイスの山岳牧場にヒントを得、観光と畜産奨励をかねた異国情緒たっぷりの六甲山牧場がすでに完成し、観光客が殺到し始めていたその影響もあって摩耶ケーブルの復活、摩耶ロープウェイが新設されるとそれらの交通機関を利用して六甲山に登ったり、奥摩耶口からバスを連ねて奥

摩耶遊園地を訪れる観光客が激増するにいたった。その結果、奥摩耶遊園地は連日殺到する観光客を迎えて日曜、祭日などはときならぬ賑わいを示すことになったが、ロープウェイの完成するまではケーブルの終着駅として異常な繁栄を示した天上寺付近は完全に没落して往時の盛況をしのぶべくもなくなった。

◎　再度山一帯の遊園地化

神戸市の都心部の背後に横たわり神護景雲二年（七六八年）の和気清麻呂の草創にかかる名刹大竜寺の所在地として、また延暦年間弘法大師入唐の際ここに登り求法を祈り、大同年間に帰朝するや再度上って大願成就を感謝したために摩尼山改め再度山（ふたたびさん）となったといわれる六甲の前山の一つ再度山は高度も四六八メートルでさほど高くはないし、山頂部はもとの、準平原面の名残りともみられる平坦面が広く横たわり眺望もよくはない。ところが再度山は神戸市の都心部に近く、オフィス出勤前の早朝に登山するには、生田川上流の布引の世継山（四一八メートル）などとともに手頃の山で、裏山登山最盛期には早朝一〇〇〇人の登山客を迎えるなど神戸裏山登山史の重要な役割を果たしてきた。そうしてこうした神戸市民のなじみの深い土地と都心部の諏訪山間に昭和九年にコンクリート舗装道路すなわち現在の再度山ドライブウェイが神戸市の手で建設されたし、同十四年には、修法ケ池近くの市有地六六、〇〇〇平方メートルに市内春日野道の外人墓地さらに戦後の二十六年には小野浜の外人墓地が移され、これを契機に再度山一帯は近代的な霊苑的性格をもつにいたった。さらに修法ケ原池の改修その他による再度公園の出現で、早期登山客のメッカ再度山一帯は一転して神戸市民が手軽に遊べる休養できる休養地に変ることになった。もともと再度山一帯は山頂からの眺望をほしいままにすることはできないが、北麓の修法ケ池のまわりは桜、楓、つつじなどがよく繁茂していて都心部からバス二〇分で深山幽谷の気分が満喫できる別天地であったところへ前述の外人墓地の進出、修法ケ池を中

心とした市立公園化に続く、修法ケ原、五ツ辻間の奥再度ドライブウェイの建設による裏六甲ドライブウェイの連絡も可能になり、国鉄三宮駅から市バスが通期に通い始めると都心部から手軽に行ける休養地として修法ケ原一帯の再度公園は休祭日には六甲山地随一の休養地と変るにいたった。さらに昭和十五年に紀元二千六百年の記念事業の一つとして、奥再度ドライブウェイ沿いの再度山北麓の山地百四町歩を相し、国内はもちろん世界各国産の植物四〇〇種を集めた自然林をかたちどった森林植物園、さらにその西南部約二町歩の土地を相して温帯、亜熱帯、寒帯、高山などの植物一五〇〇種を集めた小中学生、高校生の理科教材用の教育植物園が建設され、昭和三十一年から一般にも開放されるようになると再度山一帯の観光、休養地としての価値は高まる一方であった。とりわけ森林植物園は植物本来の群落形態を知るうえに便利なわが国でもユニークな植物園であるのみならず、園内の長谷池を中心に広い芝生があり、樹林間に縦横に逍遙路が設けられ、林間の景色もすばらしく、リクリエーションにこの地を訪れる人も多い。

五　六甲山頂の集落

Ⓐ　集落の推移

六甲山地はすでに述べてきた通り明治二十八年（一八九年）にグルームが山頂の三国池のほとりに山荘を構え友人にPRして以来、外人の住宅の建設が相ついだのと、邦人の中にも外人の山荘経営を見習うものも現われ、明治三十一年に一一戸、さらに同四十三年には外人山荘四四戸、邦人山荘その他を併せ一二戸、大正初期には外人山荘五四戸、本邦人山荘九戸をそれぞれ数えるに至った。外人山荘は、大正三年に勃発した第一次世界大戦の影響を受け帰国したものが相ついだため没落の運命を辿ったが、邦人山荘は第一次世界大戦勃発に伴った好景気到来で、増加の一途をたど

表 2　戦後における六甲山地の交通施設復旧並びに整備状況

昭和20年	西六甲縦走旧軍用道路バス乗入れ開始
昭和27年	裏六甲ドライブウェイ　バス乗入れ再開
	六甲ケーブル展望車備付け正常の運営にもどる
	六甲山頂回遊バス営業再開
昭和28年	奥摩耶口―奥摩耶間　定期バス乗入れ開始
昭和30年	摩耶ケーブル復旧，天上寺―奥摩耶間ロープウェイ(0.8km) 完成
昭和31年	表六甲ドライブウェイ　復旧
昭和32年	再度山ドライブウェイ　定期バス営業再開
〃	西六甲縦走ドライブウェイ完成
	奥再度ドライブウェイ定期バス乗入れ開始
昭和36年	芦有高速道路芦屋―有馬間 (10.6km) 完成
昭和42年	六甲トンネル(2.8km) 完成，神戸―有馬間距離大いに短縮される。

写真 3　最近六甲山頂に続出し始めた豪華な貸山荘

った。とりわけ昭和五年、阪神電鉄が唐櫃村その他から買収した三三〇万平方メートルの広大な土地を開発するに当り開発方針の一つに山荘化を取り上げ、建売り別荘、貸別荘の建設に力を注いだので昭和十二年には山荘その他の建造物は三〇〇戸を上廻ってきた。昭和十三年七月豪雨によるドライブウェイの破損、同十六年十二月の大東亜戦争の勃発、同十九年の六甲ロープウェイ、摩耶ケーブルの撤去は、六甲山地の観光、休養地化を完全にストップさせたが、戦時中撤去をまぬがれた六甲ケーブルの戦後早々の復活、昭和二十七年の裏六甲ドライブウェイおよび山頂の回遊道路の定期バスの営業再開、翌二十八年の奥摩耶口、奥摩耶間の市バスの開通、同三十年の摩耶ケーブルの復活、翌三十一年の表六甲ドライブウェイの再開および翌三十二年の

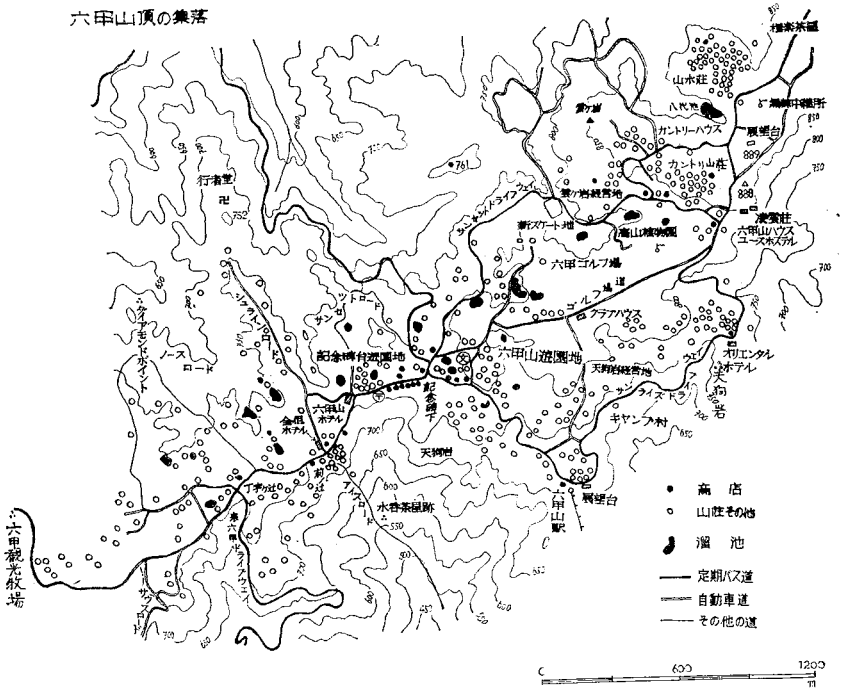


図 5　最近の六甲山頂の集落

再度ドライブウェイの定期バス運行再開というような交通施設の整備ならびに昭和三十五年頃から始まった所得倍増景気によるレジャーブームの到来で六甲山地に休養、観光、ハイキングをかねて訪れる人たちが激増した。また、戦後民主化時代の到来で銀行、会社あたりで山頂に保養所を競って設けるようになったし、時代の要求に応じてバンガローに代って短日月契約の豪華な貸山荘、ユースセンター、ユースホステルなど保養施設も時代の要求に応じて多彩化の傾向を示すことになり、昭和三十四年には六一八戸すなわち戦前の最盛期の戸数をすでに二倍上廻るにいたった。

また戦前の保養施設はグルームの三国池々畔の山荘が代表するように展望はよくないが、建設しやすく安全性の大きい六甲山頂に東西に広がる分水嶺の平坦地に拡大する傾向をみせてき

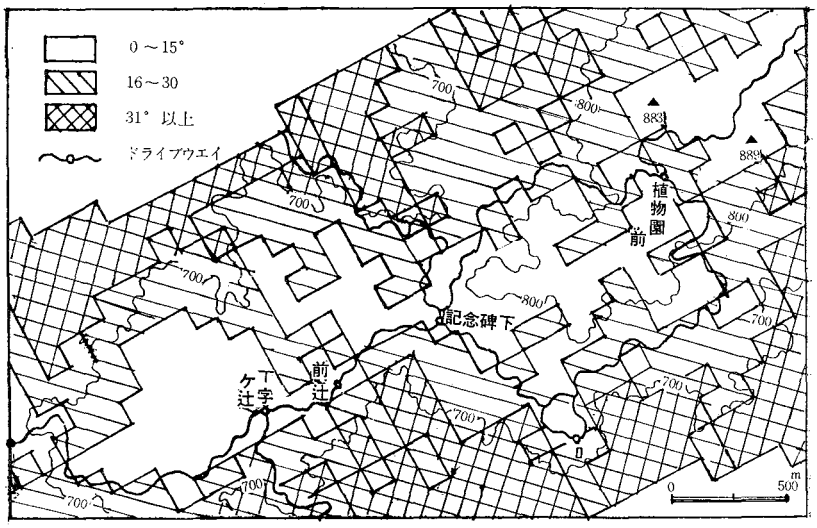


図 6A　六甲山頂の高度と傾斜

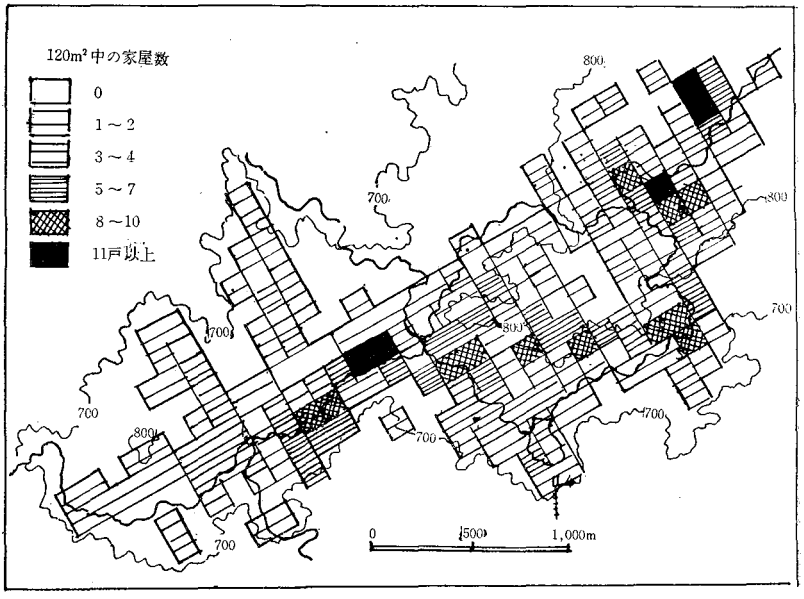


図 6B　六甲山頂の家屋密度（昭和35年現在）

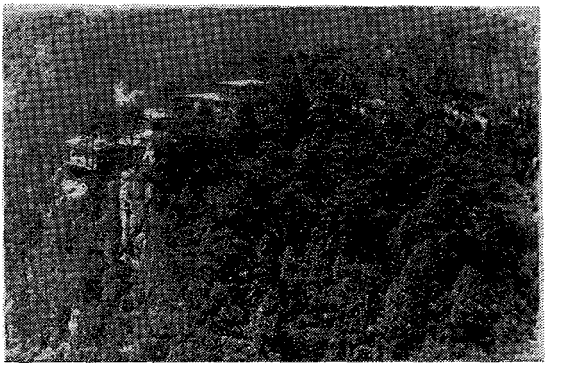


写真 4　断崖絶壁の景勝地に進出した最近の六甲山頂の山荘

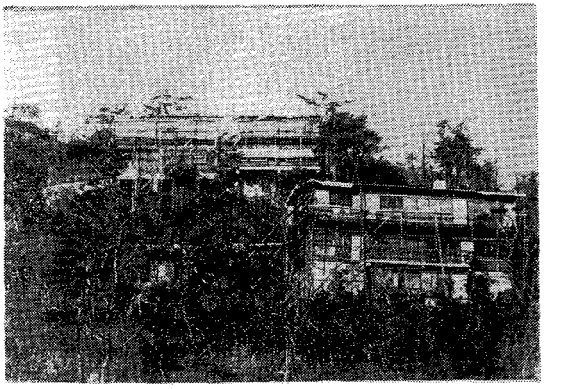


写真 5　昭和40年9月の台風で屋根を完全に吹きとばされた急傾斜面の山荘

たが、戦後は、建築技術の進歩、平坦地の払底というより、展望第一主義から、断崖絶壁に臨んだ主尾根あるいは副尾根末端部の危険きわまる土地に保養施設が進出し、台風通過時には甚大な被害を蒙るという憂慮すべき傾向が強まってきた。その結果最近の六甲山頂の保養施設は、西に観光牧場付近から東は極楽渓、北はダイヤモンドポイント、雲ケ岩から南は六甲ケーブル山上駅から天狗岩にわたる東西四キロメートル、南北二キロメートル余の広い地域に亘る尾根や斜面に分布するにいたった。

Ⓑ 集落の密度と傾斜

神戸市発行の昭和三十五年測図の三千分の一の六甲山頂付近の地形図に一辺四センチメートル、実距離一二〇メートルの方眼をかけ、その中に記載されている建造物のうちバンガローのような短期的な建造物は除外し、同一敷地内

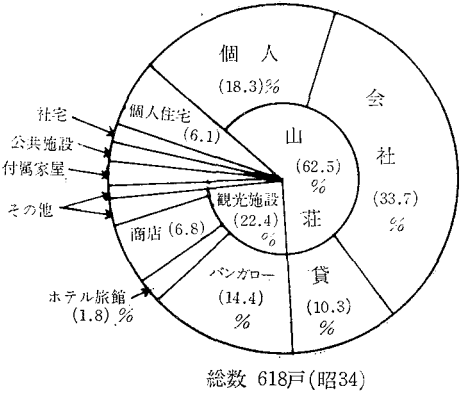
の別棟は一応二戸と算定し、家屋密度を求めると次のようになる。まず家屋の密度の最も高い地域についてみると、それらの地域は山頂の交通の要地記念碑西側および、ゴルフ場東側の山水荘、カントリー山荘地区ということになる。前者は、記念碑下が観光バスの駐車場になって以来急速に商店密集地化した地域であり、前者は極楽茶屋西側の地表傾斜一五度以下の平坦地を利用して阪神電鉄が小規模の建売り、貸別荘の建築を早くから始めた地域である。記念碑西側、山水荘、カントリー山荘付近についで家屋の密集度が高い地域は天狗岩住宅地、記念碑東側の六甲小学校付近、前ノ辻から丁字ケ辻にかけての地域ということになるが、それらの地域は何れも傾斜十五度以下の尾根の平坦面から十五度以上の急傾斜面に移り変る南向の傾斜変換点の景勝地を利用し、保養施設が近年急激に増加の傾向を示してきた地域で、六甲山頂の最高の山荘地域といってよい。またシュラインロード、ノースロード、サウスロード、ケーブル六甲山頂駅から記念碑前に通ずるドライブウェイ西側に家屋の密度のかなり高い地域が横たわっているのは、副尾根づたいの傾斜十五度内外の展望のよい地域を求めて、戦後保養施設の進出傾向が高まってきたためである。要するに六甲山頂の最近の保養施設は安全率は大きいが眺望はよくない尾根中央部の平坦面から、安全性では問題はあるが眺望のよい尾根端の傾斜変換地点に進出する傾向が強くなったことは否定できないが、地表傾斜との関係からみると、標高七〇〇～八〇〇メートルの主尾根ならびに副尾根上の傾斜一五度以下の地域に集中傾向が強く、一五～三〇度の傾斜変換地点に近づくと家屋の密度も急激に低下し、標高七〇〇メートル以下、傾斜三一度のまわりの断層崖の急傾斜面に近づくと完全に家屋は姿を消し、近時山麓の神戸、芦屋市などでは住宅の山地進出が顕著になったというものの両者の間に完全な不連続面がみられ、両者を結びつけるにはいたっていない。

◎　集落の機能

表 3　個人会社山荘の推移

	昭和29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
個人山荘	62	70	89	82	94	104	105	105	109	113	114
会社山荘	43	30	57	68	87	100	115	128	136	132	140

六甲山自治会会員移動表による。



総数 618戸(昭34)

図 7　機能別家屋の割合

機能を分類してみると、会行銀社、その他の民間企業団体所属の山荘が全体の三三・四%（二〇九戸）を占めて最も多く、個人山荘は一一三戸（一八・三%）でこれにつぎ、以下バンガロー、貸山荘、商店、個人住宅、旅館、ホテル、公共施設、その他の順になっており、山頂の全戸数六一八戸のうちその六三%が山荘であり、バンガロー、旅館、ホテルを合せると全体の八〇%近くが保養施設ということになり、一応予想通りの結果が現われている。ところが山荘の所有形態からみると戦前は個人所有の山荘が独占的傾向を示していたのに対し、戦後は会社、民間企業団体所有の山荘が次第に数を増し、昭和三十五年頃から会社その他の企業団体所有の山荘が個人所有

六甲山頂は前述の通り英人グルームが三国池のほとりに山荘を構えて以来急激に休養、観光集落化したところであるが、観光、休養集落化するにつれて商店も増加してきたし、保養施設も社会経済事情の変化でその内容も変ってきたし、郵便局、電話局、保健所を始め最近では同山頂特有の地形に着目して郵政省、国鉄の無線仲継施設も進出してくるなど山頂の集落の構造も多様化の傾向を示すにいたった。

試みに神戸水道局が山頂に水道を建設するに当って昭和三十四年度に調査した山頂六一八戸の家屋の

のそれを上廻り始め、同三十九年には会社その他の企業団体所有の山荘が五六%を占めるにいたり、六甲山頂が高額所得者の休養地域から最近一般庶民の休養地に大きく模様がえしてきたことを物語っている。また社宅はともかくとして個人住宅が全戸数六一八戸のうち三七戸（六・一%）を占めるにいたったことは六甲山頂が季節的な居住地時代がすでに去り、常住地に変ってきたことを示しており興味深い。他方電鉄会社その他は戦前短期間滞在する観光、休養客に山頂の景勝地に六甲山ハウス、凌雲荘、六甲オリエンタルホテル（以上阪神電鉄系）、六甲山ホテル（阪急電鉄系）、全但ハウス、一般庶民の短期滞在客が手軽に利用できる保養施設としてバンガローなどを準備してそれに当て、前ノ辻北側、天狗岩付近のバンガローはキャンプ村とともに六甲山頂の名物となったが、戦後一般大衆の経済生活が向上するにつれ、これを利用するものが減少し、これに代って短期契約のいわゆるマンション式豪華な貸山荘の出現となった。また豪華版好みの戦後の傾向は個人あるいは民間企業団体所有の山荘にも波及し、戦前阪神電鉄が提供した間数三、台所、便所、玄関付の建坪三〇坪前後の木造か瓦葺きの小規模の独立山荘から、最近では延建坪五〇～六〇坪以上、三～四階、鉄筋コンクリートの豪華山荘の出現がめだってきた。こうした山荘の鉄筋コンクリート化は、市民の経済生活の向上によることもさることながら、戦後山荘が眺望はよいが、台風通過時には強烈な谷風を真ともに受け木造家屋が甚大な被害を繰り返しているにもかかわらず、そうした被害を受けやすい六甲山地南側の急傾斜面に進出する傾向が相変らず強いだけに、今後も引き続き顕著になるであろう。

六　人口の構造

Ⓐ　人口の推移

六甲山頂のように夏季の酷暑を避けるための避暑地として発達したところで人口を正確に把握するのはむつかしいうえに、現在六甲山の主要居住地域となっているところは昭和六年に西灘、六甲村、同二十二年に有野村、同二十五年に住吉村が神戸市域に編入されるまでは行政区画の一本化がおくれ、わが国の人口調査が正式に行われるに至った大正九年以降でも、神戸市に編入に際して旧住吉村、有野村などの地区別人口資料が散逸してしまった今となっては、昭和三十年以前の六甲山頂の人口数について正確に把握することは困難になった。そこでやむを得ず残存資料で六甲山頂の人口の推移について調べると一応次のようであったかに思われる。

六甲山頂に人々が住居を構えるにいたったのは、すでに述べた通り、英人グルームが山頂の三国池付近に山荘を構えて以来のことであるが、明治三十三年六月には「一昨年六月、山頂の外人避暑地より帰神せる知名外友某氏の談によれば、目下同地滞在の外人はルカス、グルーム、トニックラフトの諸氏を始め約六〇名あり……」（明治三十五年八月二十七日付「新日報」）とあり、すでに夏は六〇名の滞在客があったように思われる。さらに大正二年になると「六甲山に現在居住している外国人は一四四人（内男五四人、女九〇人）、使用人および商人二一九人（内男七七人、女一四二人）……」（大正二年九月十四日付外字紙）とあり、同報告には子供は除外されているので夏季の山頂住在者は内外人併せて三六三人にのぼっていたと思われる。ところが明治中期以後六甲山頂の主要居住者となった外人は大正三年に勃発した第一次世界大戦を契機に帰国し、代って本邦人の居住者が年を追って多くなり、戦前の最盛期の昭和十二年には六甲山頂の戸数は三〇〇戸を上廻ったので、夏期の人口はもちろんのこと常住人口もかなりの数に達したとみられるが、それを裏付ける資料はただいまのところ見当らない。

昭和十三年七月豪雨による登山路の破損その後に深刻度を加えた東亜の動乱で六甲山頂の観光、休養地化は一頓座

表4　戦後の六甲山頂の人口

	兵庫区			灘区			東灘区			計			
	世帯	男	女	計	世帯	男	女	計	世帯	男	女	計	
	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	
昭22	54	93	94	187	—	—	—	—	—	—	—	—	有野村誌
〃25	—	128	125	253	—	—	—	—	—	47	50	97	175	175	350	国勢調査
〃30	—	120	107	227	—	102	126	228	—	—	—	117	281	291	572	〃
〃35	—	—	—	221	—	—	—	252	—	—	—	158	—	—	631	〃
〃37	—	—	—	223	—	—	—	320	—	—	—	99	—	—	650	住民登録
〃39	—	—	—	233	—	—	—	371	—	—	—	110	331	383	714	〃
〃40	92	130	161	291	97	242	220	462	54	65	97	162	243	437	478	915	国勢調査

をきたしたが、終戦後は戦災で焼け出された人たちの中で山頂の山荘に住居を移すものもふえ、昭和二十五年には兵庫区唐櫃地区で二五三人、東灘区住吉町西谷山で九七人を数えるにいたった。その後兵庫区唐櫃地区のように戦災、疎開者の引揚げで一時人口の減少をみたが、それは寧ろ例外で戦後の経済事情が好転し、六甲山頂の観光、休養化が復活するにつれ六甲山頂の人口は、昭和三十年には五七二人、同三五年には六三一人、同四十年には九一五人にのぼり、大正初期の人口の三倍にもなったし、性比別人口の不均衡も次第に大きくなり、昭和三十年頃では女子人口を三%ばかり下まわっているにすぎなかった男子人口も昭和四十年には九%も下り、性比別人口の構成からみても観光、休養地的性格が強くなってきた。

Ⓑ　年齢別人口構成

昭和三十九年の住民登録人口七一四人（男三三一人、女三八三人）の性比別、年齢別人口の割合を調べると、三〇～三五才、六五～七〇才の男子人口が同年齢層の女子人口数を上廻っているだけで、その他の年齢層では何れも女子人口数が男子人口数を上廻り、性別、年齢別人口の割合でも観光、休養地的性格を示しているものといえよう。また男・女それぞれの年齢別人口構成について調べると、男子人口では五～二五才、三五～四〇才の人口の割合が同年齢層の全国平均人口の割合よりいちじるしく小さく、その反対に五〇～七〇才の高年齢層の人口数の割合が同年齢層の全国平均人口数の割合にくらべてかなり大きくなっており、女子人口では五～二〇才の年齢層の割合が全国平均同年齢層の人口の割合にくらべてかなり小さく、三五～六五才の年齢層の人口の割合が同年齢層の全国平均にくらべてかなり大きくなっている。男女を通じ二十才以下の年齢層の人口の割合が少いのは、六甲山頂には小学校はあるが、中学校以上の学校設備はなく、進学に多大の困難を伴ったり、山上の商売、ホテルなどの勤務者の大半は住み込みではなく通勤の人が多いためであろう。また男女ともに中高年層の人口の割合が、山荘の留守番、作業員としては定着率の大きい定年退職者か未亡人などによって主として占められているためと思われる。また、こうした中高年齢層の人口の割合が大きいことが前述の二十才以下の若い年齢層の人口の少ないことを裏書しているようにも思われる。

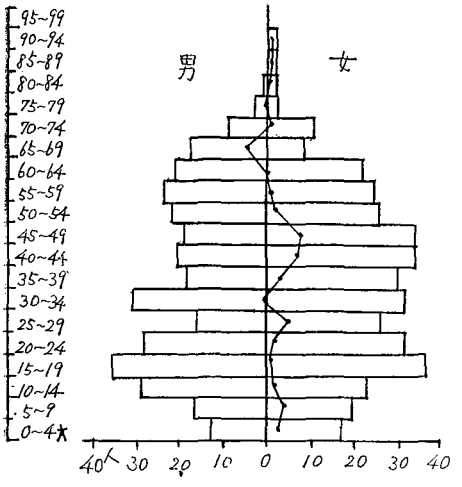


図8　六甲山頂の年齢別人口構成

ⓒ　職業別構成

六甲山頂在住者の人口の性比別、年齢別構成をみると前述の通り、全国の形態とは全然趣がちがって観光、休養らしい特色がみられるが、山頂住民の職業別構成を調べると、夏季を中心として保養地らしい特色がみられ興味深い。すなわち昭和三十九年における山頂常住者二五四世帯の職業別構成をみると、世帯主が山荘の管理人で妻が無職の場合が全体の四八％（一二二世帯）を占め、断然多く、世帯主が主として山頂の職場に勤めるサラリーマンで、妻が山荘の管理人である場合が全体の一八％（四六世帯）をこれに次いで多く、以下世帯主がサラリーマンで妻が無職、世帯主が自家営業、その他の順となっており、山頂定住世帯の六八％はいずれも山荘関係世帯ということになる。また山荘と無関係のサラリーマンの場合でも職場はホテル、郵便局、電話局、無線仲継所、カントリーハウスゴルフ場、六甲ケーブルなどのように職場のほとんどが山頂に所在する職場に限られ、終戦直後に多かった山下の職場にケーブルで通勤するものは最近は十数名近くにまで減少してしまっている。

ⓓ　人口の流動圏と定着率

昭和三十九年の住民票を指票に六甲山頂常住者七一四人の前住地を調らべると、前住地が六甲山地南麓の南神戸が全体の二〇％を占め、同山地北麓の北神戸が一六％を占めてこれに次ぎ、以下山上生れ（一四％）、西日本（十二％）、神戸市を除く兵庫県（一〇％）、大阪府（一〇％）、山上の他の地域（九％）、東日本（五％）、近畿（四％）の順になっており、前住地が兵庫県内であるものが全体の四六％、前住地が神戸であるものが三六％となっており、隣接地域からの来住者が絶対多いといわねばならぬ。また神戸市からの来住者のうち南神戸からの来住者が北神戸からの来住者を四％上廻っているが、南神戸と北神戸の人口比は二二対一であるから、人口数からみると北神戸からの来住者率が絶対

多く、六甲山頂と北神戸との結びつきがきわめて強いといえよう。また前住地が山頂にあるもの、あるいは山頂生れのものが一九%も占めていることは、近年六甲山頂での定着率が高くなったことを示しているが、こうした関係は山頂住民の在住年数にもよく現われている。すなわち山頂在住者七一四人の在住年数を調べると、在住年数が四年以下のものが全体の四〇%を占め最も多く、五～九年の在住者が二〇・九%を占めてこれにつぎ、以下一〇～一四年（一四・三%）、一五～一九年（一〇・九%）その他の順になっているが、在住年数二五～二九年（五・一%）、三〇年以上（六・一%）、すなわち戦前からの在住者も一一%にのぼっており、六甲山頂住民の居住年数が長期化を示してきたことを物語っている。

七　結　び

神戸市や阪神諸都市の背後に横たわっている六甲山地は最高地点の東六甲山で九三二メートル、高さはとりたてていうほど高い山ではないが西は垂水、塩屋の浜から東は武庫川畔にかけて東西約五〇キロメートル、大阪湾から山田川、有野川にかけて南北一〇キロメートルに亘って横たわり北摂、丹波地方と神戸市や阪神地方との交通、連絡を妨げ、明治中期までは採草、薪炭材を求めて山麓の人が入りこんだり、北摂と神戸地方の最短コースを選んだ人たちが通過するにすぎず、明治の中期神戸市在住の外人が山頂の風物、気候に注目して山荘を構えるまでは無人地域として放置されていた。ところが一度英人グルームが山頂に山荘を構え友人に宣伝するや、これに見習って山頂に山荘を構える外人が相つぎいわゆる外人村ができ、長崎県の雲仙、神奈川県の箱根仙石原とならび称せられた避暑地として有名になった。もっとも六甲山頂の外人村は大正三年欧洲大戦が勃発して山荘所有の外人の帰国が相つぐと没落するかに見

えたが、こんど欧洲大戦の勃発で懐工合がよくなった邦人が外人に代って山頂に山荘をを構え始め、こんどは富豪の避暑地に変っていった。そして昭和の始め、山頂の広大な土地を唐櫃村から入手した阪神電鉄や阪急電鉄などが観光、休養地として綜合的な開発に乗りだし、山頂に高山植物園、カントリーハウスその他の観光、遊覧施設を設けたり、高額所得者に対してのみならず一般庶民向の保養施設を提供したり、さらに、山麓と山頂の交通施設の整備に呼応して山頂の交通施設を整備するや、観光、休養、登山にこの地を訪れる人達が激増し、外人村時代には僅か五、六〇戸を数えるに過ぎなかった山荘も、昭和十二年頃は三〇〇戸を上廻り、わが国随一の観光、休養、避暑地に発展した。明治中期の外人村発生以来急激に進んで六甲山地の観光、休養地化は昭和十三年七月豪雨によるドライブウェイの崩壊、昭和十九年におけるケーブル、ロープウェイなどの運行停止、金属回収の名による摩耶ケーブル、六甲ロープウェイの撤去などで山頂は陸の孤島になり、生命を絶たれたかに見えたが戦後の混乱期がすぎ、交通施設が整備されたり、神戸市が改めてこれまで観光休養地化がおくれていた奥摩耶再度山一帯の開発に乗り出すと、レジャーブーム時代の到来もあり、観光に休養にあるいは登山に六甲山頂を訪れる人たちが激増し、日曜、祭日などは山頂は市街地なみの雑沓地に変ってきた。他方六甲山地の特色であった保養施設も増加する一方で昭和三十五年頃には六〇〇戸を上廻り戦前の最盛期の二倍を上廻ってきたし、そうした保養施設も、戦後の世相を反影して、戦後は社員向の保養施設が年とともにその割合が多くなり、戦前の特色であった高額所得者の保養施設の割合は急激に減少してきたのみならずマンション式豪華な貸山荘の進出がめだってきた。山頂住民の性比別あるいは年齢構成をみると、終戦時にみられた男女数の均衡は、山頂の観光、休養地化が進むにつれて破れ、女子人口数の増加が目だってきているし、山頂定住者の職業の大半が山頂関係者であるのと教育施設の不備が影響して全国の平均とくらべると、青少年層の人口の割

合が少なく、中高年層の人口の割合が多くなっている。また山頂住民の定着率あるいは移動の範囲を調べると、移動の範囲は北神戸を中心とした隣接地域に限られているし、山頂生れや、定着年数二十年以上におよぶものすなわち終戦直後から引き続き住んでいる者もかなり多数にのぼっており、山頂住民の生活が安定期を迎えているように思われる。

（明日に東南アジアへの出発を控えて　一九六八、七、二五）